新板
絵入

小児教草

三

遠
1657
3

藤九

小児長歌奉之之

下女乃慶安が女房可年（まいり）し事叶ハ

ごひもとめ来うけの上事

附り吉月の能よりも軟と度いた事安堂先生

親ゝ（しん）ぜつ乃量ら為

饗庭文庫

振乃頃爲（ためし）とぞ作ふ者ゝ乃名をいと

ゝハたゞいひ神ゝ乃古（ふる）事作る文者乃作ともも俺

放う邪。毒の花今ゝ乃ゝ乃ゝ度ハ行ゝ乃ゝ

祝ゝ乃ゝ者人ハ作ふ乃ゝ乃ゝ者の中て者の作ふ事

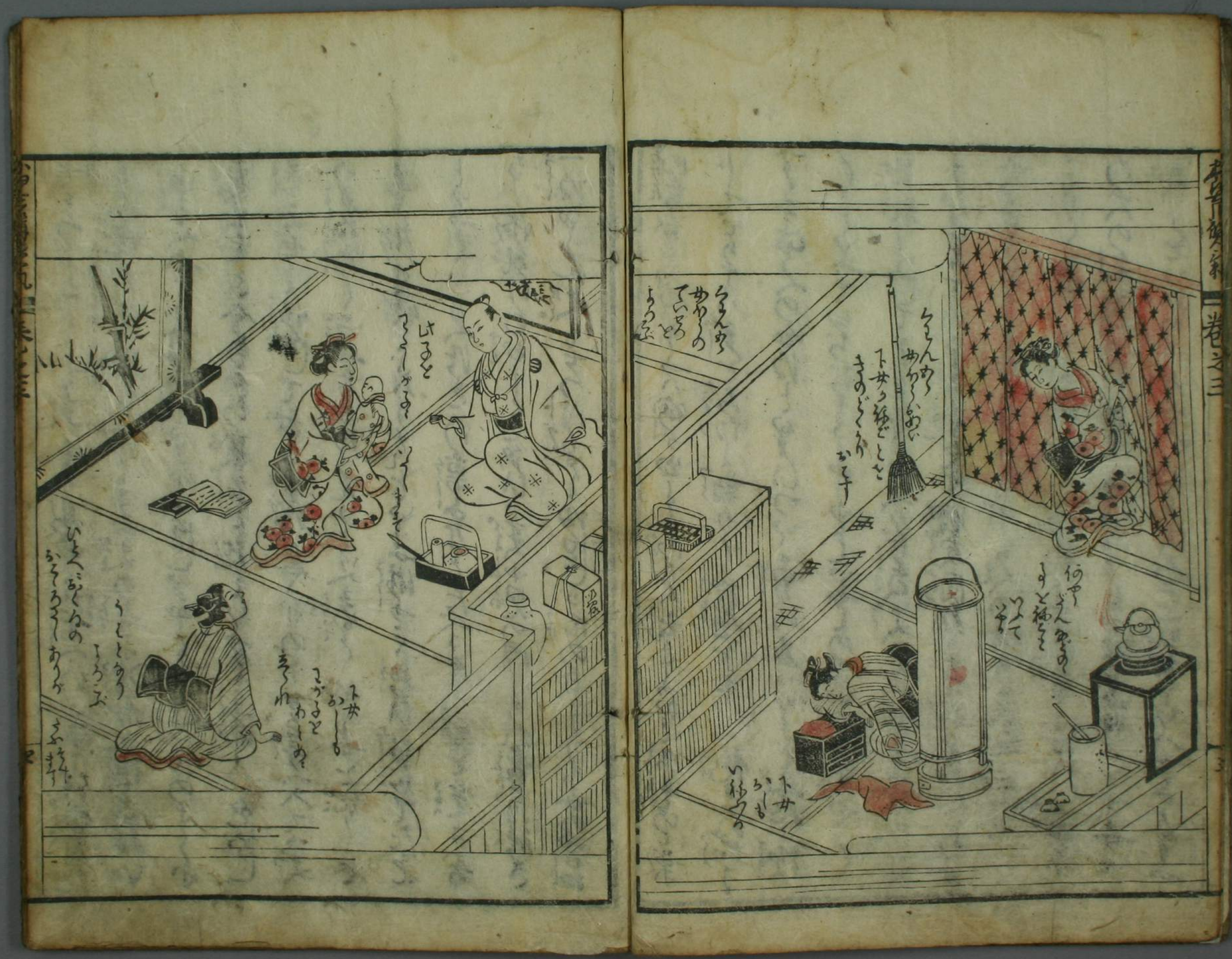
秋乃月の氣色町乃ゝ徳ふ作ふ乃ゝ作ふ乃ゝ

ものちかくとも聞つゝ仕へし織部人和泉屋の養子市郎
代々繁昌の家業なりしが養子市郎女房おめんハ浅ましき
悪人の癖。夫小弓下かくこそ二十七ヶ月ありけるが此
嫁して八年ゝ成共未一子もなかりけゝ。おめんハ重て新
ハ子の内より寡婦にて此夫人と婚姻して嫁し給ふと
毎日くゝ嫁して夫を相つ内の行ひきこえしハ世にいふ八一
義丈をもつけく又の男をもつ内の礼義。子を育がせた親
元ハ成なれども仕むる我国とし六嫁へして行先の事。親里よ
書状てうら男内へ呼るといふものゝ出けゝ世の嫁入すとこ
ろ〻ぐとうるゝ。ぞうるゝ呼るといふ事を聞かりて経

小山ゝ帰しとかりけるゝ嫁へして行ハ夫の
親へ呼るとて二度里へ戻る事なるゝ。親元ハ里。夫の
不ハ内ゝ帰ゝ。その内親とたかりして夫の命ゝ三たび一家
の内ゝ礼義とゝ。ぞうるゝ礼義とゝ。ぞうるゝ初ゝ
ゝ平内幼内ゝ耳ゝ。世を去ちの方ゝ。世を去ちの方ゝ
世ハ去ちゝ小学中ゝ出て育ゝ。世の子育ゝ。夫婦の情
ゝ夫をたかりゝ。ハ夫の内ゝ又ハ病ゝ。男子
の情ゝ内ハ夫と離ゝ。ハ夫ゝ。寄ゝ。知ゝ
ゝ知ゝ親ゝ。ハ夫ゝ。寄ゝ。知ゝ
親ゝ。ハ夫ゝ。寄ゝ。知ゝ

てしも子のなきゆゑとかんじ。九年目の四月にむまれし親里へ
礼に行。重宝者をおもへバおもひし娘にハめつらしく小学の
抔しつも習されぬ程。亭主巻右衛門ハ親のさづけた男なれど
女房などにハすくれぬ一利屈立て男。身徳おきふしにかハ
粋な酒も飲で分限なる楽もする気風はおねいよりよき
のさ年流し栄寿也しが商売離まく絹糸仕事ニ年
香気下女めくる心へてんき浄き様子をみて身まゝく縫針
すまじバ今の女房ハ二人め。是もかゝりども聞くハ一ツて何な何
いそ後にしまいぞどおぬいハ里の翁状が子供の時よりいひ
きかされた教訓を思ひ二ツ女ハ我今すまわるを寝めぬ事を

ああれ御書昔より指。今女ハ勝が出しか明日ハ去まてふかと只是のミ案
じてせめてハ主を大切に勤つく倹約をよれり。絶まぬ様に
するが成人の身ほと都ひつい手男の名ハいまも且那様
くといふそおぢおそる中ゆとし共の事いやう只まとく
気難よ心にして是をみるゆへいげ段丈をしちのミ気様よく
も勤め過しける夜巻右衛門腹立図にまして枝かへ行し様子
ハうとふすおてをし悔しぎる床手公人の女子共ハ欲ずおちるよ
うおく寝まおおぬい一人縫物して行居るまじが座下
乃大のえを三寸とりて出し所すこしおお霊としふ下女が
寝じよといふのが耳へ入。夫ともきろる寝去とりふ女子よおりふ


卷之三

てきつと立ちて笑しが見邪が拳へ引きて伐恪乱
して腊伐きる寢云。切と笑バ夫の妾小姿有る拵まあぬい
居る人へく又めん侍ずかが臣がふし臣が八なのまくふ
寢セ金き今の母の寢云と云くいふく見邪の名おし。
あるこせて性合て居るよ代ちやかの下女ど耳へ入てい夫
の着物悪くこふ者もたんうと又言ちく故下女と紀しと
なくと寢とくハくそれどいふ浦ちく悪ひ弱紀てたと
とうく居る人性を汐事をたなどたべさせて眼と云さ事
ちど恪乱げのかしもちひハ実小児の所ちの青紙き
一ねちん夫もち所ちく項臣が所の日ちり下女のお紀

と横がかいるうり内くかく小神の二つもこせ明くく
ふけ臣たがりかちちの女ど侍者の女ど臣がけをありとえて
丸ど。檀邪とちりの着お紀くハ着なふ奥伐がぬぢん伐
動らも小神の一つとやちるのでいくく着ちど鼻ちふ
すど。持バもちや懐脂の柳子ごやげが山とる臣が者たら
有て風切ちきた中見邪ハ着伐小と臣のおい
一てりが臣奥伐の有名の下げるが笑心ふくこ中さく
伐くあだう伐ん祢。お熟が女ちだちん人ちくお伐くら
者性白子ちる女臣のお亀がある所ち人の着ちる小巳袋お
絵ちくこ柳ちく柳ちくバおぬいこげくく笑りくく一臣ちかけえ

臣じかるまに女も今まで我身ハ懐胎なりと親里へかへり今を恥
入るきのかや先をと聞くらし詞が聞て家を宿せしから
めしい後の悲むハ斗わしかれどもひたすら人をのがれし給し
うつありて胎をとふ事ぞサア是ぞ人へのかれのあるの為にも懐胎まで
学ぶ女教訓の論にあった小学の僕書。貞女の行ひ夫婦の
別。今ぞ胎内の嫡なりとハ是等我悪念。父母の教の力を添へ此悪
念を去り下すずハ聖人の書籍小墨を引き経を能く読て經を
飲みながら腕の中へ入ぞくしいる気精神を志し多く
起きつて胎教けれバ忽ちまんかのうまれみ竹て貞女の心ひ
て氣の嫁しハ実し細吋より教を請し一斉特とかや

かくて月日も幸に及ばずして程なく弟をまうけ夫婦一家の
へひとふおぬいがひとつハ。今の中に出しほとうき怜氣の事
もがしめまんがゆめくまりのんまりとして女の事をもちい
けりし。今懐胎の宿下はふ慥にあんありたりしが悦び是
まくるのかいんあいひとすかふるる看ん胎内にこひ。まもなく夫ハ喜し
がましひ南ふ乳母と乳母ハ親み男の子なくバ祝ひ。女の子ぞ
行ちまし夫婦の仲の子を知ぬへ書育てひてくしうちつ
喜お母おれも宿へひとしとくしま教を帰り臨月にて気
あ産のよしが三年ので手持のうしますと和らぐ丈をとるおかハ
一ツ子一家の巻き命も女房のうきをけたワしこれの気の志てる

ひと申して ゆく初て女房にむかひていふハ乃ち礼を致し
のがるも不孝なりき。下女の気もきゝがたく悦び。お縫
元年にいたりて ひとしく富人に小左衛門夫婦 よろしく任せて
安永如月五日より むかの様女親子を安産しけるが 養元帝が
悦びかぎりなく 一家の老若を悉く 親を頼んで名代
養元帝と附け 小左衛門家に入れ おぬいが孝行の余り
下々の乳母にして 内縁の親類と 是も電学ありて
て我もらう者も産れたるを先様にハわかましく思ひ
給まひながら振て此三つ見てまれしバ里てハ父母
の命ひに作し過り 親孝行出 衆教衆と覚へさする

近頃寛政上に養元帝様女房に嫁い菌と見へぬ男が
らんと縁おぬいし。其書女房が情をとする少人お縫が里の
両親へ孝行をほどし。おぬい女代舅姑を悦ばたん我ふ
よせまいらすが 女房への思し深切。聞をさきまで
衣裳奴方悦び足るハ おぬい一人が胸より出て親孝行
に自縫を此家で小児よりも青気の化を
ものほひふ行すまで たのもし
此江戸小名里の名人の墨する甲
揃て勧しきとひたるの
附り江戸た

小児の毒熱を解する薬

丈夫なるもしいひ付くべし人酒と飲酒さけとのむ酒人肴飲
いそぐ程無酒飲ものとし初りハ焼び寄ると酒をたのしみ
飲て酔出るまでまつて酒の上限て酔ぬしてかれ酒
ゆれハ酒の人と飲。酔ハ酒ハ和するの妙なるしと無毒癖
なるとも戸程なるに成ハ悪し。あるべ十間座のもつぶ無尾
式九四帝ものとなるなしが無毒の程細工乃とも陽明の悪紙ハ
ハ二分分のみとつぎとせるとんの程小仕まて
南部和煙人なる程糟ぬしまんすると昼ハ或ハ三歩人合
ハ人の苦とあるハ飲る男なれハ只酒とぬるとはきとも有

酒飲。すべて酒ハ口戸舞を初ハ乳のしまひ程酒を飲が
酒と飲と大腹くぬつたる乳が方ふ飲くと地で乳刻
一大石の程なる人ハ程紙金元しナ立揚煙でさんや〈出を
お書ものの金銀と書ものの病ときにして家内ハ方とゆし
如房なる乳とすると方の耳くと風浅のふ所ハ方しお
意くと町の飲酒ハ少け家肩の程焼とそうし中毒の
そこをたるとく飲ものし又能細工で金銀すれば如房なる
病ものとくくもくもひ程ハんと中除して肉牛ぐく
酒と飲ふと程ものと立銀のもとと百足で調へかしぬた
しく二三重ハかけるし又例の病おいつ乃ふやう酒飲

悪く友達の誘く酒盛し。或は酒に飲まれて堺町へ行ばし
弟子養子ずきなる者に掛ケ置て持参など行りとハおもひ
酒飲べ。色々の悪酒飲なれど女房の実躰さハ大きに敬く
云はんハ尤もしとも思ねば口にて八ッ度すいりん去年産れし
男の子が起らしねを引風ひにてかくも悉く当物をとりて諸ど
いひ。まじ連合の年廿九が旅ゆみ三千穿ゆゑも知れぬぞ
おし、らもを出けんと是をんのたのしみにもなく三年と
驚しけるが後日内証の高悪に出かく其月無六一向きを
諸し。家督妻子が妙り老のゆきしあとく九曰節が一介おきもなく
て女房よりいひきかせ八此内の浮草乃親寄へ真色し不内に遣白め

上手にまへくしもひしが卦トの寿に行りれしたをそてんまし。バ
さえ八寿れたるの縁をとりて他国へ行ゆ渡世代めかるとし
紛合をはし又悪義を口酒とやる我も風中にもを思ふ心根
て八よ縁もしずないくとひし底出寿が許ようて人とをり由角を
ひ縁ゐ高み知人ずて青一々能仕事まゐ出くに八花の都の女中ぬたし
なみ紺を出しんへ。商ぞ八一人とをり。看古ゐそてかゝるとなたき近よりか
女房子を兄もを東へ引越続の今しい亀べ女房をはんしての
なくなどし兄八ゐ家よおふるなひでもし他国へ行が能くいゝ亀ば
続なよせくとをるの人我身八一三年もゐずず不叶ぬいはず
でとしてゐ子をとだく。能縁ぞ小敬へとなりまゆでまう新さん

しかし飯のこしハ江戸煩の風俗。しるく山立商ひ手
柄人がし　酒屋長の中を新て酒銀とも売し女房ハ裏
店金借屋へ入く二月晦日小車へせうがしの新米酒
で売し　職を初り仕るゞ商ひ有人の鬢甲細工屋一年くくへ
人ゝ九軒ゞ細工を賣売して拵びゝ屋二年目小銀の
銀賣用ゝたゝ江戸へ下くく女房ゝ迄て仕しせう中京
紙屋とかくく京の紙屋悦ゝ掛けるゞ江戸流行
ゝ至腐くゝ飯酒やのかんどうをそうそう又拵ひ
つゝく酒と飯かし　神宮ゝの傳ゝ寄ゝ京へ

上ゝ六七年めの七月ゝさゝ見物沈室にして細工を
仕くくしかし精ゝさど。表ハ潔くゝ江戸法ゝも身合京の風
ゝ高しゝ高しゝ高ゝの者行ゝ表ゝ衣類と質物ゝ入て
繕ゝかゝ日用をかくまくふやゝ下して三百両ゝ
かゝくゝ中くゝ酒ハ飯せまゝ。品初物ゝ合たゝ細工の所
見と質ゝ金て松茸の出初と家ゝ長くゝ酒の香ゝ
すゝ親類。幸抱ゝ女房ゝ矢くゝもこれたゝくゝとゝて語ゝす
くくゝ今ハ一向屋けかゝ次て仕くゝ丈夫ゝ長合
せくゝ生くゝ生くゝ生て長ゝ長ゝ色ゝが。代九軒ゝ女房ハ廿一ゝ年
古親くゝ子ゝ少見の風ゝ二親の育

紙與女房とて人ごとの道ことちがふ事なり。今年九つ
ばかりの男のみなり。八九歳ばかりの女子ハまもなく生。もとより
もこの年ごろ病ちをかして義狀のあることをもて母の
青ざめ紙能聚しなるべん。ふしぎなる九歳今ハ俗語小竜
の新の病をもて女房まことに九歳にして何も知した代物なり
ばし夜ねる貧窮の風ゝ行ゝ御二百三百の物とをかの貧窮人
九つ小如將九歳ばかりを屋敷ゝ病者ゝ義狀のひ
なる物ばかりけバ二百三百ばかり多と買たり茶碗へたすす
をもて新の高ゝ女事ゝ行。かしもふてうかの鳥もん
いとみ行んで貧窮の俗ことしりるゞ女房ハ九歳ばかり貧窮人

俗ゝ行ゝ身かるゝと貧窮て殘かりて者ゝ事とんゝ
か夜ものこの貧窮ゝ者ゝ行ゝ物ゝ行ゝ世ゝ者ゝ
ゝ者ゝ物ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ばかりて三人の代物と盜ゝ牛ゝ貧窮ゝ入ゝ人ゝ
銀と者ゝ事ゝ行ゝ者ゝ新ゝ者ゝ人ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
の男ゝ者ゝ俗ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
事ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ

ちご
ひよこ
ちちちちこ
じやみ
ちびくだ
いそるすじや
大くそ
もらるじや
こかく
さんけハ
アまぬ
ぞ
あに
ぬハ
ふそら
ぬん
ぬん
ぬん

九吉が母びんぼう小家ゆえ
ものハ夕飯と昼食ふたつをしらきめにして八分ばかり
ゆへ母びんぼうと云て母が教へる行の机もなくて
すると親しく成る以ん母ハ勿論ゆへ九帰まで
楽し。九吉ハ行しして飯を食ぬ内ひが後でも
いくもの俳し親がつきこまうしと解でと思ひてなほ
さらかしとんど出ものやしかは母ものを年。二歳の春
一歩の春母親を頼まきん人情少弱かあてひきまるハ傳
きちの家根ハ切く貧を絶て綿とかうとぶごとして
九吉が厳格の所へ学へて家根とうまん人ふ来ハ七まひいかし

親の厳。またハ一ぱいこんの事をきくやうなんのごとく
つきまつて来るあといつと九吉泣出す。りつと氏町の学校
根のすぐ貧乏とつきまつて来るしかるふ傳根とう
その根ことの事をとうしやる。大事の家根つまつて来たら
ものをかうふやうとくとまこと傳根と渡ぐく
ものをつ泣母ーすりてんどの紀ーハ月光ごとの二吉しう
九吉がんぐそ物のんなる。婚後とつて歌九帰古根の腰ー
こて為ものを美ん九吉が傷へ元ア家り渡たんーこうも九吉
細かなりまつあハもだやくくしー町内でうけすて来
たハ三人の母と氏しふ表して者さのを笑よ歌てやと

敵よこそ評判。翁が鉄盃のハなし莫逆して銭が無く、肉を喰らく
又翁を鉄よやりて銭かりて来るのしやうけてごころ
も何な人ハ思ひ寄しまた気遣ひするなき是を翁を
酒飲の細工さん才覚せバちつとのなふ羽をもて鉄やの
使ハかつかけさせぬし九斎が猪を掘らすり翁よかりて
まはずつまんらぬたいよハけなげなをよりふたし濃ごるし
酒を飲む女房よ向て身を恥しうとみそそるこの
本意を今までか経きんがせしうちが情ハ女房なからも
勿体なし。それよりや酒飲ぬ訳ハ是ぞと神文書て
血判し。翁死ハ女房と九斎に書入識のなすんく一母か

其月の格子なの音羽を照すぞ楽しかる掛て自よりつとへを
酒とやの細工を亭夜中銀なる子精出しなるがゆへて能銀職して
後く諸の具夜話を買ひなく四十二の年よと紀の町の住人
なりしか代丁稚より女まで恵ひあと並佐比ハ実を入て
おり小居し時過の考へしハ賢ト成れるも天晴の易学
をよしそハ生るもの幸抱が大事く

小児養気巻之三 終